SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

The Son 息子

2022年／イギリス・フランス映画
配給：キノフィルムズ／123分

2023（令和5）年3月31日鑑賞　TOHOシネマズ西宮OS

Data　２０２３－４１

監督・脚本・原作・製作：フロリアン・ゼレール
原作：フロリアン・ゼレール戯曲『Le Fils 息子』
出演：ヒュー・ジャックマン／ローラ・ダーン／ヴァネッサ・カービー／ゼン・マクグラス／アンソニー・ホプキンス

みどころ

１７歳になり思春期、反抗期を迎える息子と父親との関係は難しい。ゼレール監督の「家族３部作」の第１部『ファーザー』（２０年）は認知症の父親に焦点を当てたが、第２部たる本作では、１７歳の息子ニコラスに焦点を。

両親の離婚が思春期の息子に与える影響はさまざまだが、養育してくれている母親の家から、浮気した女と再婚した父親の家への引っ越しを願う息子は珍しい。しかし、弁護士として大成功し、大統領選挙に立候補する上院議員の選挙参謀チームへの参加が求められるほど有能な父親なら、それもありなん。しかし、その妻は今、生まれたばかりの息子の世話に大変だから、良き弁護士と良き父親の“２足のわらじ”はうまくいくの？

そんな心配は無用！そう思わせる展開の中、ある日ニコラスのベッドの下から自傷用のナイフが発見されたから大変。これは一体なぜ？さらに、現実に起きた自傷行為の結果、舞台は精神病院での攻防になるが、その結末は？

舞台劇のような緊迫感いっぱいの映画はメチャ面白い。それは『ファーザー』でも立証されたが、本作も同じだ。幸せ？それとも最悪？本作ラストの二通りの展開をしっかり確認し、舞台劇の醍醐味をたっぷりと味わいたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■ゼレール監督の「家族３部作」の２作目は“息子”■□■

私は『ファーザー』（２０年）（『シネマ４９』２６頁）を観てはじめて、その原作と脚本を書き監督したフロリアン・ゼレール監督を知ったが、フランス人の彼が同作の主演にアンソニー・ホプキンスを起用するについては様々な苦労があったらしい。同作は第９３回アカデミー賞で脚本賞を受賞したからすごいが、同作はゼレール監督の「家族３部作」構想の第１作だったらしい。そして、その第２作が本作の『The Son』、第３作は想定通り『マ

ザー』だ。

『ファーザー』はアンソニー・ホプキンス扮する、認知症が進行中の父親と、父親の世話に苦しむ娘との非常に面白い物語だった。それに対して本作は、弁護士としてニューヨークで大成功を収めている父親のピーター（ヒュー・ジャックマン）と、今は１７歳になっている息子ニコラス（ゼン・マクグラス）との物語だ。もっとも、本作冒頭に描かれるのは、ピーターが再婚した妻のベス（ヴァネッサ・カービー）と、彼女が産んだばかりの男の子をあやしながら幸せそうに過ごしている姿。そこでチャイムが鳴り、ピーターが玄関に出てみると、そこに立っていたのは元妻のケイト（ローラ・ダーン）だったから、アレレ。ケイトは、なぜここに？

■□■１７歳は思春期真っ盛り！ニコラスの悩みは？■□■

船木一夫が歌った「高校３年生」（６３年）が大ヒットしたのは、私が中学３年生の時。中高一貫の男子校に通っていた私は「ぼくら、フォークダンスの手を取れば、甘くにおうよ黒髪が」という２番の歌詞が何とも眩しく、そしてロマンチックに感じられたものだ。高校３年生といえばだいたい１７歳だが、１７歳をテーマにした名曲は「高校３年生」の他にも、南沙織の「１７歳」、西郷輝彦の「１７歳のこの胸に」等がある。私が映画のダントツベスト１に挙げるのは『サウンド・オブ・ミュージック』（６５年）だが、そこでは長女リーズルが１６歳から１７歳に移っていく時の自分の恋心を歌った「Sixteen Going On Seventeen」という素晴らしい曲が歌われていた。１７歳は男女問わず思春期真っ盛りだから、恋愛とは？人生とは？生きる意味とは？等々の悩みが多い。

しかして、今１７歳のニコラスが学校に通わず、「自分を睨みつける顔が恐ろしい」と母親のケイトに言わせているのは一体なぜ。ケイトが、禁止されているにもかかわらず元夫であるピーターの家を訪れてきたのは、ニコラスが父親のピーターと暮らすことを熱望していることを伝え、ピーターの同意を求めるためだ。しかし、そんなことを言われても、ピーターが再婚した妻ベスは生まれたばかりの子供の世話で大変。そんな家の中で、いくらピーターの実子とはいえ、１７歳のニコラスと同居するのはとてもとても。ピーターはそう考えたが、相談してみると、意外にもベスは寛容で、ニコラスを受け入れ、ピーターの長男として分け隔てなく世話をしていこうと言ってくれたため、赤ん坊を含め親子４人の新生活が始まったが・・・。

■□■良き弁護士と良き父親の“二足のわらじ”狙いは？■□■

ニューヨークの大手法律事務所の大きな個室で執務しつつ、移動中は頻繁に携帯を取っているピーターの姿を見ると、弁護士としての彼の充実ぶり、成功ぶりがよくわかる。その上、彼は今、大統領予備選への立候補を目指す、ある上院議員の参謀チームの一員としてワシントンD.C.に来てほしいとの要望も受けているそうだから、体がいくらあっても足りないほどだ。弁護士としての私のかつての忙しさは全然彼に引けを取るものではなかったが、全く違うのは、そんなに忙しい中でも、彼は新妻ベスとの家庭生活や赤ん坊の世話

をしようと努力している点。私はその点の意欲がゼロに近かったから、ただただピーターの立派さに敬服するばかりだ。ニコラスを新たな家族として受け入れた後は、彼の学校の世話から、セラピーの世話までこなしていたから、さらに立派だ。

他方、中学、高校時代の反抗期だった頃の私を思い起こせば、いろいろな場面で父親と対立し、一人涙を流すこともあったから、本作でニコラスが父親に対して見せる優しそうな態度や聞き分けの良い言葉は到底理解できない。そんな良き弁護士と良き父親の“二足のわらじ”を履いたピーターの面倒見の良さによって、ニコラスは少しずつ明るさを取り戻し、順調に学校にもセラピーにも通っているようだから、ピーターも一安心だ。

ピーターは「メールや電話をしてもニコラスからは返事がない」と悩みを打ち明けるケイトに対して、「君は立派な母親だ。」「きっと元の生活に戻れる。」と余裕のアドバイスも。さらに、新たなお荷物（？）を抱えて大変だろうという優しい心遣いから、ピーターはベスにも贈り物をしながら、「君の懐の深さに感謝している。」と言葉をかけていたから、まさにピーターは良き夫としても満点だ。もっとも、夫婦でそんな会話をし、これから愛し合おうというところを多感なニコラスに見られたのはちょっとヘマだったが・・・。

■□■ナイフは自傷行為用？護身用？ならば父親の猟銃は？■□■

ニコラスの希望に沿って母親の家から父親の家に移った後、ピーターとベスの温かい心遣いのおかげで、やっとニコラスは通常の生活を取り戻すことに。そう思っていたのに、ある日、帰宅したピーターに対して、ベスがニコラスのマットレスの下からナイフを見つけたと報告してきたから、アレレ。

驚愕しながらピーターがナイフを隠し持っていた理由を問い正すと、ニコラスは「護身用だ」と答えたが、それはきっと嘘。父親の家に住んでいる息子が、なぜ護身用のナイフを隠し持つ必要があるの？そう問いただすピーターに対してニコラスは、「ならば、洗面所に置いてある銃は何のためか？」と質問したため、ピーターはニコラスがなぜそんなことを知っているのかと驚くとともに、それは「自分が成人した時に父親からもらった猟銃で、自分は猟に興味がないから置いてあるだけだ。」ときちんと説明した上で、ナイフは自傷行為用ではないのか、と最も根幹的な質問をすると、ニコラスはそれを認めた上で、「自傷し苦痛を感じる時だけ唯一生きていることを実感する。」と説明したからアレレ。それって一体ナニ？思春期特有の精神上の不安定さはわかるものの、そこまで行けば一種の精神病では・・・？

私がそんなニコラスを理解できないのと同じように、ニコラスの気持ちを理解できないピーターは二度としないよう厳しく諫めるとともに、「お前が傷つくと自分も傷つくのだ。」と優しくなだめたが、逆にニコラスからは、ピーターの行動が母親のケイトと自分を傷つけたと反論してきたからアレレ・・・。ピーターの家に引越してきた後のニコラスは、順調に学校にもセラピーにも通っているのではなかったの・・・？良き弁護士と良き父親の“二足のわらじ”狙いは、実現できれば素晴らしいものの、やっぱり少し無理だったのか

も・・・？

■□■なぜ参謀チームを辞退？なぜ父親と面会を？■□■

本作中盤では、弁護士としての立身出世や名誉のためなら当然参加すべき、大統領選挙予備選に立候補する上院議員の参謀チームへの誘いをピーターが意外にもあっさり（？）諦めるシーンが登場するので、それに注目。それはまあ、仕方ないかもしれないが、ピーターはなぜそんな選択を？

もう１つ注目すべきは、そのついでに（？）ピーターの父親、つまりニコラスの祖父（アンソニー・ホプキンス）の家をぶらりと（？）訪れたこと。これは一体なぜ？私の父親は１００歳以上長生きしたが、中学・高校時代からずっと、この父親の子育て方針に反対していた私は、自分の子供に対して、「俺は、ああいう父親にはならないぞ」と言い聞かせながら接してきた。そんな思いは、どうやらピーターも同じだったらしい。つまりピーターがあんなに良き弁護士と良き父親の“二足のわらじ”を追求していたのは、ピーターに対して「強くあれ！」ばかりを強要してきた父親に反発し、自分はそれとは正反対の子育て方針にしようとしていたためだ。

長い間疎遠だったピーターが突然来訪したことに驚いた父親は、「病気のことを聞いてきたのなら、大したことはない。」「元気で現役を続けている。」とアピールした上、参謀チームに参加するかどうか迷っていると打ち明けるピーターに対して、「良き父親をアピールしに来たのか？」と厳しいツッコミを。そんな父親に対してピーターが、４０年前病気で死の床に臥した母親を、仕事を理由に一度も見舞わなかったことを非難すると、逆に父親から「５０歳にもなって１０代の過去を引きずっているとは情けない。」「そこを乗り越えなければ成長などできない。」と一喝されてしまったからアレレ。ピーターはすごすごと父親の家を後にすることに・・・。

父子の確執を抱えた、父親役のアンソニー・ホプキンスと、その息子ピーター役のヒュー・ジャックマンが２人だけで直接“対峙”するシーンは本作で１度だけしか登場しないが、これは正にドリーム舞台劇。誰でもそう実感できるはずだ。

■□■なぜ自傷行為を？急性うつ病の対処は入院？自宅治療？■□■

本作は、最後に「ガブリエルに捧ぐ」との字幕が表示される。この「ガブリエル」はゼレール監督の義理の息子の名前で、彼はニコラスのような急性うつ病で苦しんだ経験があったらしい。彼の顛末がどうなったのか、つまり、本作のような悲惨な結果になったのかどうかは知らないが、本作後半からはニコラスがピーターに向かって「自分や母親を捨てたくせに偉そうなことを言うな！」と、感情を爆発させる（本音を語る？）シーンが登場するので、それに注目！

もっとも、本作全編を通じて、ニコラスは不良タイプではなく、どちらかというと良い子タイプだから、私には彼が一体何を悩んでいるのか、さっぱりわからない。両親の離婚、それも父親の浮気（？）による両親の離婚が子供の心の持ちように悪影響を与えることは

容易に想像できるが、今ドキ両親の離婚などどこにでもある話だ。そのたびに１７歳の思春期を迎える息子が急性うつ病に襲われるのではたまったものではない。また、ニコラスは「父親と一緒に暮らしたい」とケイトに訴えてピーターの家に入り、ピーターとベスとの手厚いお世話の中、少なくとも表面上は順調な学校生活と家庭生活を送っていたのだから、なぜ今ニコラスが自分に向かってあんな言葉を言ったのか、ピーターにはさっぱりわからなかったのは仕方ない。まして、ベッドの下に隠したナイフで自傷行為を繰り返していたとは！

ある日の自傷行為によって精神病院に搬送されたニコラスは、そこで急性うつ病の診断を受けたから、ピーターとケイトはビックリ。その上、「この症状は両親の離婚が原因だから、症状が落ち着くまで両親は面会できない」と言われたから、さあ、ピーターはどうするの？そこでのピーターの決断は「入院やむなし。」だった。私にはそれが妥当に思えたが、帰りの車の中で、「もう大丈夫だから。良くなると約束するから」家に連れて帰って欲しいと必死に懇願するニコラスの姿が頭から離れないピーターは、再び病院に引き返し、ニコラスを自宅に引き取り、自分たちで看護すると告げたが、さぁ、その是非は？

■□■ピーターの決断をニコラスは喜んだが・・・■□■

ゼレール監督が目指す「家族３部作」は劇映画だが、そのネタになっているのは劇作家たる彼自身が書いた戯曲だ。シェイクスピアを生んだ国イギリスに負けず劣らず、フランスも文化度が高いから、優れた戯曲が多い。近々鑑賞予定の『幻滅』（２２年）は有名なフランスの劇作家バルザック作の「人間喜劇」の一編、『幻滅－メディア戦記』を映画化したものだ。

家族３部作の第１部たる『ファーザー』では、認知症の父親が住んでいる豪華な家が、娘夫婦のものであるにもかかわらず、自分の家だと思い込んでいる姿が冒頭に提示される中で、今後のストーリー展開への興味がじわじわと広がっていった。それは舞台劇特有の演出だが、後半に向かっても認知症の父親が、ここは病院？俺は誰？と思わざるを得ない状況が生まれるところから、あっと驚く素晴らしい展開になっていった。これも舞台劇特有の演出だ。このように『ファーザー』では、そのネタが戯曲であり、舞台劇としてとことん練り上げられたものだということがよくわかったが、それは本作も同じだから、本作のクライマックスに向けてはそれに注目！

ピーターが医師からの強いアドバイス（忠告？）にもかかわらず、ニコラスを自宅に連れ戻したのは、結局、精神病院に強制入院させられることを嫌がるニコラスが「良くなると約束するから。」と叫ぶ姿に負けたため。しかし、帰りの車の中でのニコラスは落ち着いていたし、自宅に戻ってからの彼の態度は良い子そのものだった。そして、「病院での匂いがシャツに染み付いているから、先にシャワーする。」と語る姿も明るそうだから、ピーターもケイトも一安心。ところが、しばらくしてバスルームからはバーン！と大きな銃声が！こりゃ一体ナニ？ひょっとして・・・？

■□■幸せ？それとも最悪？舞台劇の醍醐味をタップリと！■□■

なるほど、ピーターとニコラスとの間で交わされた、あの猟銃についての会話はこのクライマックスに持っていくための伏線だったのか！さすが、舞台演出の達人の仕掛けはすごい！私はそう感心していたが、続いて今度は一気に時代が進み、立派に成人した上、作家としてデビューを果たすことになったニコラスが発売前の新刊本をピーターに持ってくるシークエンスになるから、アレレ・・・。何だ、あの銃声はニコラスの自殺を示すものだったはずだが、何とか命を持ち直し、結局作家として成功するまでに成長したのか。そりゃ、めでたしめでたし。しかし、そんなハッピーエンドで終わらせるのは、今ドキのくだらない邦画みたいだな。そう思っていると、さらに、アレレ、アレレ・・・。

それに続くホントのラストのあっと驚く展開は、あなた自身の目でしっかりと。舞台劇の醍醐味をたっぷりと味わいたい。

２０２３（令和５）年４月６日記